

谷川 稔編

『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』

山 辺 規 子

本書は、二〇〇二年十一月三日、京都大学でおこなわれた「西洋史読書会」大会七〇周年記念シンポジウム「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ——新しいヨーロッパ史像を求めて」をベースとして、さらに多方面の執筆者を加えてできたものである。このシンポジウムにしても、本書にしても、現在ヨーロッパ史を考える立場にある者の強い危機意識の所産であるといえよう。すなわち、一つには、「大学改革」の風の吹き荒れる昨今、英独仏を一つのモデルと考えていた時代ならともかく、いまや西洋史など学ぶ必要などない、西洋史はまさしく「虚学」そのものであるとされる危機感。また、いまや留学が容易になると、自分が留学した国の細分化した研究に埋没してしまう危険があるという危機感。シンポジウムの趣意書にも「非ヨーロッパ人の視点という距離感覚を生かしつつ、また安直なオリエンタリズム批判にも陥ることなく、『ヨーロッパ・アイデンティティ』の虚実をさまざまな角度からみきわめて」、「新しい世界史像を模索する一歩となり、ひいては『日本の西洋史研究』のレゾン・デートルを確かめる契機」となることを期待することが明らかにされている。

る。

さて、それではいかにして「ヨーロッパ・アイデンティティ」を考えるか。現在、グローバル化の波の中で、「先進国」「文明国」たることを謳いあげてきたヨーロッパも、その存立は決して安穩としていられるものではない。一方、EUは、しだいに加盟国を増やし、ECCが発足したときのような比較的同質的になりやすい「ヨーロッパ」ではなくなっている。このヨーロッパのアイデンティティを歴史的に考察するために、本書では、大別して四つの視点から考察が進められていく。

第一の視点は、古代史、というよりヨーロッパ人の古代史研究からの視点である。まず、庄子大亮は「古代ギリシアとヨーロッパ・アイデンティティ——ヨーロッパの源流としてのギリシア像再考」において、アテナイを中心とするバルバロイ観とアテナイ人が体現する「純粋なギリシア文化」、「理想的ギリシア人」が、近代ヨーロッパにおいてヨーロッパの源流とされることによって、複合的ヨーロッパをまとめあげるアイデンティティ意識に大きな意味を持ったことを指摘する。また、南川高志「古代ローマ帝国と近・現代ヨーロッパの自己理解」は、古代ローマ帝国の辺境に位置したドイツおよびイギリスにおいて、ゲルマン人やブリトン人のような民族的起源につながる反ローマ的な思潮と、「ローマ化」に「文明化」と同様の価値を認め自国においてローマ化の跡を追いつめる親ローマ的な思潮が存在することを指摘し、政治的状況の中でいずれかの思想が強調されることを確認して、ヨーロッパの大半を包含したローマ帝国がヨーロッパ・アイデンティティ考察の重要な論点になるとする。そのローマ帝国がキリスト教

化されてギリシアを中心に存在したビザンツ帝国を通してヨーロッパ・アイデンティティを考えようとするのが、井上浩一「ビザンツ帝国と『ヨーロッパ・アイデンティティ』」である。井上によれば、ビザンツ帝国人は古代ギリシアを自分たちとは異質なものと認識していたのに対し、近代ヨーロッパ人は中世ギリシア・ビザンツ帝国を他者として排除し「古代ギリシア」を自己の過去に組み入れた。二〇世紀になって、ビザンツ帝国はヨーロッパ史の射程に入れられるが、その場合にも「ヨーロッパ史」を基準にして異質か同質かを問うものであったとする。

以上、第一の視点は、古代ギリシア、ローマ帝国、ビザンツ帝国が、ヨーロッパ人が自ら記憶すべき歴史としてどう位置づけられていったかという視点からのヨーロッパ・アイデンティティ論であり、歴史書を読みとる前に歴史家、歴史研究を調べる必要に基づく議論である。この三つの論文が挙げる歴史研究が、ギリシアでもなくイタリアでもなく、英独を中心とするものであることが、古典古代研究の実際を示唆しているように思われる。

第二の視点は、中世史からのアプローチとまとめることができるだろう。このうち、原型「精神史としての起源史——ブルターニュにわたるブリタニアとケルト」と江川温「西欧の民族史観とヨーロッパ・アイデンティティ」は、エトニ（前近代の民族的共同体）とヨーロッパ意識との関わりを論じる。原は、フランスのブルターニュにおける民族的アイデンティティ形成のもととなる「起源の自覚」の歴史的形成を分析する。ここでは、民族起源論が取り上げられ、トロイア起源説にみられる古典古代の權威による考へと、ガリア・ケルト、ケルトマニアのような独自の起源

説のいずれもが、ヨーロッパ・レヴエルの起源説と結びついていることが指摘され、いわばヨーロッパ知識人に共有されるヨーロッパ意識を特徴づけるものとされる。一方、江川は、中世においてはヨーロッパ世界がキリスト教世界とは乖離しており、中世の「ヨーロッパ人」が特性を持たないものであったことを指摘したうえで、一四世紀から一六世紀にかけて、他者としてのイスラーム世界、「キリスト教世界」の危機意識、古典古代に対する意識の変化によって「ヨーロッパ」観念が明確な姿をみせること、各国の民族的史観において、この「ヨーロッパ」文明のいかに寄与したかが語られる段階に達することにヨーロッパの独自の特徴をみる。フランス史の「記憶」の歴史の枠から描かれた上記の論文に対して、服部良久「地域と国家——非『国民国家』型統合」は、「国民国家」の枠を超えた多元的にして統合的なヨーロッパをいまどう描くべきかの提言といえるであろう。すなわち、ヨーロッパ中心部におけるインタローカルな都市ネットワークを形成する「地域国家」と中東欧の複合的政治的統合の比較考察によってこそ、ヨーロッパ・アイデンティティの多様性を再認識できるとする。

この中東欧のありかたに注目するのが、第三の視点である。中世のエトニの議論はほとんどアプリアリに西ヨーロッパ「ヨーロッパ」とし、EUもまた西ヨーロッパにその起源を持った。その結果として、東中欧は「辺境」たることを余儀なくされた「遅れてきたヨーロッパ」とされる。東中欧諸国のEU加盟という現実を背景に、具体的に東中欧のいくつかの国について、ヨーロッパ統合と国家のありかたが分析される。

この点で最も難しい位置にあるのが、EU加盟申請しつつも西ヨーロッパが「ヨーロッパ」の一員とみなすことに抵抗を覚えているように思われるトルコである。このトルコの問題を取り上げるのが新谷英治「オスマン朝と近世ヨーロッパ像」である。新谷によれば、まさしく近世のオスマン朝の脅威が、オスマンの支配の及ばなかったヨーロッパ（西ヨーロッパ）と支配下に入った東ヨーロッパという二種のヨーロッパを顕在化させ、オスマン朝から死守されるべき領域として意識されるヨーロッパの覚醒につながったとされる。

また、服部が複合的国家として捉えた「東中欧」の概念を明らかにしつつ、ポーランドを中心として進められている東中欧構築の試みに焦点をあてたのが、小山哲「よみがえるヤギエウオ朝の記憶——ヨーロッパ統合と東中欧史の構築」である。ポーランドの歴史家のハレツキの提唱に始まる「東中欧」の地域概念は、近世においてヤギエウオ朝の支配下にあったポーランド王国・リトアニア大公国、チェコ王国、ハンガリー王国を含む。この領域の研究をおこなう東中欧研究所は、新しい国民史とその枠を超えた広域史研究の二つの課題を取り上げつつ、まさしく政治的背景の変化を表象する研究であることに注意を促す。より現代的、政治学的見地からの考察が羽場久渥子「EUの拡大と「中欧」認識のゆらぎ——ヨーロッパと国益のはざまで」である。「ヨーロッパ」化とされる指標は、キリスト教、議会制民主主義、市場経済の確立、市民社会と国家主権の保持であり、その基準を満たした国からEU加盟が可能になるとされ、「中欧」は「ヨーロッパ帰」「自由と豊かさ」「ロシア・バルカンとの差異化」をめざし

て成長した。しかし、EU加盟の具体的問題、NATOの問題、「アメリカの影」の影響が動揺をもたらし、「ヨーロッパ」の境界線が曖昧であることもあいまって、その行動が直線的に語れなくなったことを指摘する。逆に大津留厚「オーストリアとヨーロッパ・アイデンティティ」は、EU加盟には一時失敗し遅れでもヨーロッパの一員であるはずと自負するオーストリアの複雑なケースを取り扱っている。大津留によれば、かつてドイツ人として、あるいはハプスブルク帝国人としてのアイデンティティが優先したオーストリアは、いまや「特性のない国家」としてEU内に位置をしめしているとされる。

本書のなかで、唯一EUの中心的存在の一つである近現代フランスからのアプローチである杉本淑彦「ナポレオンとヨーロッパ意識」は、逆にヨーロッパの中心から東方問題がどう認識されていたかを示す。杉本は、ナポレオンの姿を伝える絵画に、仲間であり尊重されるべきヨーロッパ人と軽蔑されるべきオリエント人の区別を読み取る。歴史家が、ナポレオンはフランスの覇権のもとでヨーロッパを支配しようとしたとして、EUと一線を画そうとするのに対して、一般にナポレオンがEUの先駆者と意識されているという温度差の指摘は、社会のなかでの歴史学者の位置を考える際に意識すべき指摘であろう。

さて、最後の視点は、本書の中で「鏡としてのヨーロッパ」としてまとめられている視点である。すなわち、ヨーロッパでありながら必ずしもヨーロッパの中に意識されるとはいえない地域としてのイギリスやロシアからみたヨーロッパ像、地域としてはヨーロッパに含まれないがヨーロッパ文化が生み出した「アメリカ

カ」にとつてのヨーロッパ、そして、世界史の中でヨーロッパと対立する歴史的世界として描かれてきたイスラーム世界からみたヨーロッパ像である。

まず、イギリスについて取り扱うのが、井野瀬久美恵『「イギリス」を創り直す——ブリテン、帝国、ヨーロッパ』である。井野瀬は、「イギリスであること（ブリティッシュネス）」が、イングランド人とそれ以外の「ブリティッシュ」にとつて持っている意味を問い直し、「ブリティッシュネス」と『（大英）帝国』と「ヨーロッパ」の三者のこみいった関わりをみる。とはいえ、ポストコロニアル時代にますます複雑化する「ブリティッシュネス」と、それに結びつけられているヨーロッパ・アイデンティティとの関係の解明は、まだ課題として残されている。

イギリス以上に、ヨーロッパ内に位置づけることが問題視されるのがロシアである。藤本和貴夫「ロシアからみたヨーロッパ」は、そのロシアが意識する「ヨーロッパ」を取り扱う。いうまでもなく、一九世紀以降のロシアでは西欧派とスラヴ派が並存対立していたが、藤本は、ナポレオン時代からロシア革命にいたる時代の知識人の口を借りながら、「立ち後れたロシアは、後発であるがゆえの特権を生かして一連の中間段階を飛び越え、一定の時点に到達しよう」という伝統的なまなざしを引き継いでいったことを示す。

もう一つの曖昧な存在がアメリカである。このアメリカについて、松本悠子「アメリカの自己像——歴史的記憶としてのヨーロッパ」は、「新世界」「白人」「西洋文明」という言葉を手がかりに、「記憶」としてのヨーロッパという視点から議論を展開する。

松本は、アメリカにとつてヨーロッパの歴史的記憶には拒否と共有の相反する性格があつたこと、アメリカで形成されたヨーロッパ像がまたヨーロッパに影響を与えたとして両者の相互作用を指摘している。

最後を飾る羽田正『「ヨーロッパ」と「イスラーム世界」？——二項対立的世界史叙述の克服にむけて』は、外からみた「ヨーロッパ」論とはいえ、いささか性格を異にする議論である。羽田は、ヨーロッパ中心の世界史観の修正を迫る「イスラーム世界」という歴史世界が叙述の一つのありかたとしての「メタ地域」にすぎず地理的に規定できないことを指摘する。そのうえで、「ヨーロッパ」もまた地理的に規定される地域としての意味以外に、「イスラーム世界」と同様に理念としての「メタ地域」としかいえない性格をもつとする。「イスラーム世界」「ヨーロッパ」が世界史の叙述の枠組として使われてきたものにすぎないとすれば、これからの世界史はこれとは異なる「歴史的地域」にもとづく叙述が求められるとする。いわば、日本人による「世界史像」の提言であり、ヨーロッパ・アイデンティティをめぐる議論というよりも、日本人による「世界史」叙述を意識したもののだが、本書の目的の一つ「新しい世界史像」の提示に対する直接的な答えであらう。

さて、本書の視点は、まさしく歴史学が現代との対話であることを感じさせる。ヨーロッパにおいてキリスト教世界が世俗化を進める一方で、多くのムスリムが構成員に加わっているいま、ここには、かつてヨーロッパキリスト教共同体論に基づいて強く意識された「ヨーロッパはピレネーに始まる」ということは、

どこにもみられない。この点についていえば、編者は、イスタンブルのハギア・ソフィアとならんで、イスラームとキリスト教の二つの宗教が出会う「記憶の場」としてコルドバのメスキータを取り上げ、そこにヨーロッパの多元性をみており、イスラームはヨーロッパの内なる要素の一つになっている。しかしながら、本書において、ギリシアやローマ帝国がヨーロッパの共通のアイデンティティの要素として取り扱われるとすれば、やはり正面きってキリスト教の問題を取り扱うものがあってもよかったように思われる。もちろん、教皇ヨハネ・パウロ二世がヨーロッパをキリスト教的文化共同体としてとらえる主張をそのまま受け入れるわけにはいかない。しかし、地理的ヨーロッパをそのまま文化的「ヨーロッパ」に置き換えられないとすると、西ヨーロッパがギリシア正教、カトリック（とプロテスタント）をどう取り上げ、「ヨーロッパ」に位置づけているのかは重要な問題であろう。

また、本書のヨーロッパ・アイデンティティをめぐる議論が、南北よりも東西を機軸に構想されていることもまた、現代を意識したものとして強く印象づける。二〇〇四年の五月一日に東中欧の十カ国がEU加盟した。ここ数年のEU加盟に向けた時期において、ヨーロッパの「辺境」と位置づけられる国々、「東中欧」諸国、東欧諸国は、社会主義体制の崩壊後自らがまさしく「ヨーロッパ」であることを主張する必要性を感じ、政治変革や経済改革と並んで、歴史叙述にもそれを求めている。本書は、このような現在の状況を背景にしたものであり、「東中欧」が取り上げられるのも当然であろう。この面で、オーストリア、ハンガリー、ポーランド、トルコという多様な性格を持つ領域を専門とする研

究者からの議論があることは特筆できよう。

しかしながら、歴史的にヨーロッパ・アイデンティティを捉えるるとすれば、西欧の内なる「辺境」にも向ける眼もまた必要であろう。ヨーロッパは、仏独という大国だけでできているわけではない。本書ではあまりふれられていないが、ローマ・カトリックの中心であるイタリアですら、「北西ヨーロッパ」ではないために、「辺境」においやられることがあるのである。東中欧だけでなく、小国やさまざまな地方の中には、民族意識としては脆弱な基盤しかもたず、国民国家としての険しい道を歩んできており、EUの中でこそ一定の位置を得るがゆえに、そこに希望を託すものが少なくない。注目すべき小国の例としては、独仏という大国の間にあつて、自らの意味を意識させるためにもEUの諸機関を招致したベネルクス三国が挙げられよう。

地方を挙げれば、もつと多くの例を見出せる。たとえばスペインのカタルーニャは、ずっとキリスト教圏にとどまり、シャルルマーニュの帝国にも属したがゆえに、スペインという国家よりも「ヨーロッパ」の一員であることを求める。自らが必ずしも好ましいものとしなない国家の一部よりも、豊かなヨーロッパ連邦の一地方であることを求めた北イタリアの「北部同盟」に属する諸地方にも、同様のことがいえる。独仏のはざまにあるアルザス・ロレーヌもまた然りである。このような地域の扱いについて、服部がヨーロッパ中央部を貫く「都市ベルト地帯」の比較研究を提案しているとはいえ、これはあくまでも現在におけるトランスナショナルな研究の提案であり、EUの中にあるさまざまな「地方」のアイデンティティとヨーロッパ・アイデンティティをめぐる議

論ではない。

さらにいえば、すべての「西ヨーロッパ」がEUに属しているわけではないことも忘れてはならないだろう。北欧の国で唯一EUに属さないノルウェーも、ヨーロッパの中心部にあるスイスも、EUに属さなくても自らの存在をヨーロッパの一員と規定するであろうが、このような「ヨーロッパ内」のアンビヴァレントな存在を考え合わせたときに、どのように「ヨーロッパ」は意識されるのだろうか。

二〇〇三年に始まるイラク侵攻にかかわる対応にしても、ヨーロッパ諸国が一枚岩ではない。それを思えば、ますます「ヨーロッパ・アイデンティティ」を定義づけることが難しいことを印象づけられる。一方に、地理的な「ヨーロッパ」が存在する。たとえヨーロッパ人が作り出した枠組みであるとしても、時代によりその領域が変化するとしても、地図のうえで「ヨーロッパ」と明記される地域がある。ところが、文化的な「ヨーロッパ」はそれとは一致しない。EUという存在は、ヨーロッパ論を活発にさせた。しかし、本来経済的体制、政治的な体制として作り出され、

拡大してきたEUは、さらに「ヨーロッパ」概念を複雑化させた。いうまでもなくヨーロッパ・アイデンティティは変化しているのだが、それを歴史的に捉える難しさを、本書は改めて教えてくれるのである。だからといって、その試みを放棄すべきではない。

古代史から現代史まで、イスラーム研究者まで含めて議論が交わされた一つの「場」が、今後につながることを期待したいと思う。なお、本書に所収されている論文のうち、南川論文、服部論文の主旨は、『ヨーロッパ統合の理念と軌跡』（紀平英作編、京都大学学術出版会、二〇〇四年）でも展開されている。また、同書において、小山は「トボスとしてのサルマティア——ポーランド史におけるヨーロッパ的アイデンティティ」と題する論文において、やはり東中欧地域におけるヨーロッパ帰属意識をみる。一方、杉本が取り扱ったナポレオンについて、同書では服部春彦がナポレオンの政治的・経済的統合計画の未完の現実という側面から取り扱っている。本書とあわせて参照されるべきであろうことを付け加えておく。

(A5判 三三九頁 二〇〇三年十月 山川出版社 二八〇〇円＋税別)

(奈良女子大学助教授)